

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720319

研究課題名（和文） パプアニューギニアにおける資源開発とエスニック・アイデンティティの相互作用

研究課題名（英文） Ethnic identity and conflict over natural resource development in Papua New Guinea

研究代表者

田所 聖志（TADOKORO KIYOSHI）

東京大学・大学院医学系研究科・特任助教

研究者番号：80440204

研究成果の概要（和文）：パプアニューギニアのアンガ系集団における石油資源開発とエスニック・アイデンティティとの関係を、インタビュー、参与観察、文献調査によって検証した。そして、開発地の土地保有権を持つテワダとカメアは、土地保有法人の組織化に関心を払っていた一方、土地保有権のないメンイエは、「アンガ」という名称を活発に使うアンガ系集団全体のエスニック・アイデンティティを喚起させる運動を行っていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Among the Angan people of Papua New Guinea, the issues of ethnic identity and conflict over oil resource development have been studied in three ethnic groups by using interviews, participant observation, and bibliographical surveys. It was shown that although the Tewada and the Kamea, who had the land rights in the development area, had organized a land owners' company, the Menye, who did not have any land rights in the area, had started a movement to arouse ethnic identity among the whole Angan people, by actively using the name of "the Angan".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：開発・援助、天然資源開発、地域主義、オセアニア、アンガ系集団

1. 研究開始当初の背景

(1) オセアニアの各地では、鉱物資源や森林資源などの天然資源開発が行われてきた。開発国では、天然資源開発が現地の地域主義やエスニック・アイデンティティの喚起や創出に結びつき、場合によっては国民国家の枠組みと対立することもあった。たとえば、パプアニューギニアでは、ブーゲンビル島のパングナ鉱山の利益配分をめぐり、地域住民

とパプアニューギニア政府との間に軋轢が生まれ、1987年以降には、ブーゲンビル島の分離独立運動へと紛争が激化した。

(2) 天然資源開発が地域住民に与えるインパクトについて、オセアニアを対象としたさまざまな研究が行われてきた。それらの研究では、天然資源開発が、地域住民のアイデンティティの創出や強化と結びつくことを

明らかにしてきた。たとえば、ブーゲンビルにおける鉱山開発の帰結として発生した住民と政府の間の武力紛争を、地域住民による地域主義的なアイデンティティーの創出と捉える研究がある。また、別の研究では、1970年代より始められたサンダウン州における鉱山開発の利益配分をめぐって州政府と地域住民が対立した結果、それまで一体感を持たなかった複数の言語・文化集団が、文化や歴史の共有をよりどころに「ミン」というエスニック・アイデンティティーを創出したことが明らかにされた。

(3) 2003年より、パプアニューギニアのアンガ系集団の居住域で、石油資源の開発が始められた。アンガ系集団は、ガルフ州、モロベ州、東部高地州にわたって住む言語・文化集団である。「アンガ」とは言語学と人類学で使われてきた分類であり、現地住民には集合的なアイデンティティーは存在しなかった。ところが、石油資源開発が始められたあと、「アンガ」という名称を活発に利用することで、アンガ系集団全体をまきこんだエスニック・アイデンティティーや地域主義を喚起しようとする動きが、アンガ系の一部の住民によって行われるようになった。その一方で、このような動きに対して否定的な住民もいた。この状況は、天然資源開発が地域住民のアイデンティティーの創出や強化に直結しない事態であった。だが、その具体的な内実については全く研究報告がなく、未解明の状態であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、天然資源開発とエスニック・アイデンティティーの相関関係に関する理論構築を試みるという研究構想のもと、現代パプアニューギニア周辺社会における石油開発と地域住民のエスニック・アイデンティティーとの相互作用について明らかにすることである。2003年以降のアンガ系集団に見られる状況は、「天然資源開発は、地域住民のアイデンティティーの創出や強化と結びつく」という先行研究の知見と異なる。アンガ系集団の事例は、これまでの研究の一面的な理解を超克する貴重な資料を提供すると考えられる。

(2) アンガ系集団は、12の異なる下位の言語・文化集団に分けられる。このうち、テワード、カメラ、メンイエの三つの集団を、本研究の対象とした。この三つのそれぞれの集団による石油開発への対応の類似点と差異、相克の過程に関する分析を行う。その分析を手掛かりとして、文化人類学の視点から資源開発とエスニック・アイデンティティーの相関関係についての理論構築につながる考察

を行う。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、文化人類学の手法による、聞き取り調査、参与観察、文献調査を行う。

(2) 聞き取り調査では、天然資源開発をキーワードとしたインタビュー調査を実施する。インフォーマントは、まず、調査地域の行政官や有力者を中心に、天然資源開発と関わりのある人物を中心に選定する。そのうえで、一般の地域住民にもインタビューを行う。調査手法の特性から、インタビューのテーマは、天然資源開発を軸として、現地の環境資源利用まで幅広く設定する。

(3) 参与観察では、調査地域に住み込み、人びとの日常生活の会話や暮らしのなかに現れる石油資源開発との関わりを記録する。

(4) 文献調査では、首都の公文書館や調査地域の政府に保管されている関連資料を収集する。

(5) 本研究の対象は、テワード(人口620)、カメラ(人口45,000)、メンイエ(人口20,000)の三つの集団である。テワードは、2002年より継続的に調査してきた集団であるため、天然資源開発に焦点を絞った調査を初期段階から行う。カメラとメンイエについては、基礎的な事項を確認する予備調査のあと、天然資源開発と関連する調査を実施する。

4. 研究成果

(1) テワード、カメラ、メンイエの三つの集団による石油資源開発に対する対応の違いを、具体的に明らかにすることができた。

(2) テワード

①テワードは、開発地と最も近い地域に住む。彼らは、2005年より、土地保有法人の組織化を進めていた。村落医療従事者であるある地域住民を中心とし、土地の登記に必要な法律文書を取り寄せ、土地保有法人の設立を行った。

②パプアニューギニアの法律は、ある特定の土地に移住した先祖に関する伝承をもった親族集団がその土地の保有者として登記する権利をもつと定めている。このため、テワードの人びとは、「テワードの人びとが現在居住している地域に、一体誰の祖先が最初にやってきたのか」を特定するために、それぞれの知る祖先の伝承の内容を示し合わせる話し合いの機会をもった。

③しかし、テワードでは、祖先の名前を口にすることが禁じられている。土地を保有する権利は、その土地に住んだ祖先の名前を保

有することで正当化されているからである。祖先の名前を口にすることで、その名前が知られると、土地を盗み取られてしまう恐れがある。

④このため、先祖の伝承についての話し合いは紛糾した。それは、祖先の名称を話題にするのを拒む人びとが多かったことと、人びとによって持つ知識に違いが見られたためであった。私が参加した村での話し合いは、7日間続けられた。その結果、祖先の伝承が整合された。

⑤この親族集団の法人化の過程は、親族の過去の想起と固定化という作用がある。また、彼らの動きの全てが、国家の法制度の手続きに則ったやり方を踏んでいた。

(3) カメア

①カメアの居住地は、開発地から離れた場所である。だが、カメアの一部の親族集団のなかには、開発地に移住した祖先をもつ集団もいた。彼らの居住地は、テワードの居住地と隣接しているためである。彼らのなかには、テワードと通婚関係にある人びともいた。

②カメアの人びとのうち、テワードと通婚関係のある親族集団のなかに、テワードの人びとの行っている先祖の伝承についての話し合いを聞きつけた人がいた。そのような人を中心に、開発地に移住した先祖の伝承を掘り起こす話し合いがカメアの人びとの間でも行われた。

③開発地に移住した先祖の伝承を再構成したカメアの一部の親族集団は、テワードの人びとのあいだで進められていた土地保有法人を組織する話し合いに加わった。これによって、彼らは、祖先の伝承をよりどころとして、テワードの人びととの間につながりをつくりだそうという動きを見せた。

④このようなカメアの一部の人びとの動きは、テワードの人びとの動きに触発されたものである。その意味で、テワードの人びとの動きが、テワードの範囲を越え、カメアの人びとを巻き込んでいた。だが、それは集合的なアイデンティティーの創出に結びつく萌芽を示してはいなかった。彼らの動きは、あくまで土地保有法人の組織化に焦点が当てられていたためである。

(4) メンイエ

①メンイエの人びとの居住地は、開発地から離れていた。それにも関わらず、彼らは、新聞記事の掲載を通じて、「アング」という民族集団が存在することを示す行動を行った。

②たとえば、メンイエのある地方評議員は、新聞に「われわれアングの住む領域のなかで、石油開発が進められることは、われわれアングの住民全員に恩恵をもたらす」という声明

を寄せた。

③メンイエのある土地保有法人の議長は、新聞に「われわれはアングであるので、われわれの土地保有法人も、開発地の利益を配分される権利がある」という声明を寄せた。

④他方、メンイエの地域住民のなかには「1980年代からアングという新しい州をつくらうとする意見がこの地域には根強い」という人びとが多かった。その根拠は、アングという言葉・文化集団を表す言葉が、メンイエのなかでは1980年代より農事祭などで使われてきたからである。

⑤メンイエの人びとの動きは、全体として「アング」という民族集団が存在することを主張し、かつ、「アング」という州をつくらうという動きがあった。この動きは、国家の枠組みと対立しかねない危険を含んでいたと解釈できる。

(5) 得られた知見

①三つの集団の対応の具体的な違い

1) テワード、カメア、メンイエの人びとの対応は、それぞれ異なっていた。開発地の土地保有権をもつテワードでは、土地保有法人を組織した。彼らの動きは、国家の枠組みに則った方法をとっており、親族集団を基礎とした土地保有法人が形成された。また、カメアの人びとの一部もこの土地保有法人に参入した。彼らによるこの動きには、開発地での石油生産によって生じる可能性のある利益を受益する方法を形成することが目的であった。結果として、この動きには、テワードやカメアという言葉・文化集団のエスニック・アイデンティティーを喚起する要素は含まれていなかった。

2) 他方、メンイエの人びとの対応は、「アング」という民族集団の存在を主張する動きであった。彼らの動きは、開発地での石油生産によって生じる可能性のある利益を受益する具体的な手立てを講ずるというよりも、「アング」という民族集団の名乗りを行うことに重きが置かれていた。

3) 以上を踏まえると、石油開発によって生じた三つの集団の対応の違いは、具体的な利益配分を受益できる土地保有法人を組織できるかどうかによって由来していた。

②天然資源開発とエスニック・アイデンティティーの相関関係

1) テワード、カメア、メンイエの三つの集団の対応の違いから、アング系集団の間での石油開発では、具体的な利益配分を受益できる土地保有法人が「アング」という集団全体にわたらないという状況を示していた。

2) これは、土地保有法人が親族関係を基礎としてつくられることと、この地域の言語・文化集団が小規模であることと関連してい

ると考えられる。アンガ系集団における石油開発では、利益配分される土地保有法人が小規模であったため、集団内部の小規模集団（テワダとカメラの一部）が土地保有法人として組織されたにとどまり、より範囲の広い集団や地域のアイデンティティの喚起へと、現状では結びつかなかったのであると理解できる。

3) 予備的な考察として、天然資源開発とエスニック・アイデンティティとの関連には、土地保有形態、土地保有権の正当性、国家法との親密性、人口規模という要素が関与することが示唆された。

(6) 課題と展望

①今回の研究を通じて、オセアニアにおける天然資源開発による地域住民へのインパクトについての新しい事例を蓄積することができた。収集した事例と情報は、これまでの研究によって報告されてきた内容と異なるものであった。その資料に基づいて、資源開発とエスニック・アイデンティティの関連関係についての理論構築を行うことが今後の課題である。

②パプアニューギニアでは、2012年に液化天然ガス資源の開発が本格的に始められ、これとともに開発地は「ヘラ州」として従来の西部高地州から新たに独立した。これは、ブーゲンビル鉱山での天然資源開発によって国内紛争が生じた先例に学び、国内紛争を避けるために政府が行った措置である。このような現状を踏まえながら天然資源開発による地域住民へのインパクトを総合的に理解するために、本研究で得た資料を生かす文化人類学的研究を今後も継続していく。我が国のエネルギー政策のなかで海外の天然資源の獲得はひとつの柱であり、本研究のような天然資源開発と地域住民との関係を検証する基礎的研究は、その円滑な計画立案にも貢献しうると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

(1) 田所聖志、書評：作道信介著『糞肛門：ケニア・トゥルカナの社会変動と病気』、文化人類学、査読無、2013、印刷中。

(2) 田所聖志、書評：小谷真吾著『姉というハビトゥス：女兒死亡の人口人類学的民族誌』、文化人類学研究、査読無、第12巻、2012、136-137。

(3) 田所聖志、パプアニューギニアの子育て

(親族関係)、保健の科学、査読無、53巻1号、2011、9-13。

(4) Kiyoshi Tadokoro, An analysis of the organization of groups for fish poisoning among the Tewada of Papua New Guinea, People and Culture in Oceania, 査読有, 26巻, 2010, 1-22. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008440390>

(5) 田所聖志、アラノ——パプアニューギニア僻地村落の寡夫、Field+, 査読無、1巻、2009、4-5。

(6) 田所聖志、書評：『知識資源の陰と陽』、文化人類学、査読無、74巻1号、2009、190-193。

[学会発表] (計11件)

(1) 田所聖志、パプアニューギニア、テワダの狩猟と漁撈からみた人間と動物との境界、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月23日、広島大学。

(2) 田所聖志、人間と動物の境界についての人類学研究へ向けて：霊長類学と文化人類学の視点から、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月23日、広島大学。

(3) 田所聖志・梅崎昌裕、ポートモレスビーのフリセトルメントにおける人口流動、日本オセアニア学会第29回研究大会、2012年3月24日、岡山県倉敷市。

(4) 田所聖志、趣旨説明：ニューギニア地域研究の視点から、JCAS(地域研究コンソーシアム)・ワークショップ「人間と動物の境界は地域研究の対象たりえるか?」、2012年2月5日、京都大学。

(5) 田所聖志、「人間と動物の境界」は地域研究の対象たりえるのか：アフリカとメラネシアからの発信、JCAS(地域研究コンソーシアム)年次集会、2011年11月5日、大阪大学。

(6) Kiyoshi Tadokoro, An Analysis of the organization of groups for fish poisoning among the Tewada of Papua New Guinea, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Conference 2011, 2011年7月8日、オーストラリア、パース。

(7) 田所聖志、人間と魚の関係性：パプアニューギニア、テワダのウナギ漁の民族誌、第1回境界研究会、2011年2月5日、京都大学。

(8) 田所聖志、パプアニューギニア、テワダ社会における魚毒漁の漁撈集団の分析、

Human Ecology Seminar 2010、2010年7月3日、東京大学。

研究者番号：

(9) 田所聖志、人間と魚の連続性：パプアニューギニア・テワーダにおけるウナギ漁の事例から、日本文化人類学会第44回研究大会、2010年6月12日、立教大学・新座キャンパス。

(10) 田所聖志、「影を消し、名を呼ぶ」：ニューギニア・テワーダ社会におけるウナギ漁をめぐる民俗的知識、熊本大学大学院フィールドリサーチセミナー、2009年12月19日、熊本大学。

(11) 田所聖志、「ひとり」を手掛かりとした「シングル」現象の研究へ向けて：「家族」という語のないパプアニューギニア、テワーダ社会の独身者の事例から、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「『シングル』と社会—人類学的研究」第12回研究会、2009年7月5日、東京外国語大学。

〔図書〕（計4件）

(1) 田所聖志ほか、御茶の水書房、『「シングル」で生きる：人類学者のフィールドから』、2010、251頁（35-50）。

(2) 田所聖志ほか、朝倉書店、『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語：オセアニア』、2010、513頁（493-496）。

(3) 田所聖志ほか、京都大学学術出版会、『オセアニア学』、2009、592頁（429-430）。

(4) 田所聖志ほか、春風社、『セックスの人類学』、2009、321頁（106-140）。

〔その他〕

ホームページ等

<http://sites.google.com/site/tadokorok/Home>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田所 聖志 (KIYOSHI TADOKORO)

東京大学・大学院医学系研究科・特任助教
研究者番号：80440204

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()